124 校歌「草のみどり」の誕生

緑豊かな多摩丘陵に包まれ、四季折々の姿を見せる広大な多摩キャンパス。その敷地面積は今や五一万平方メートルを超え、東京ドーム一一個分といわれる。「草のみどりに風薫る」の歌詞で始まる現校歌は、多摩キャンパスのイメージにぴったりと重なる。

この校歌「草のみどり」が発表されたのは、一九五〇（昭和二十五）年八月十五日のことで、その場所は駿河台の大講堂であった。当時といえば、太平洋戦争が終わって間もない頃で、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）による占領統治のもと日本の民主化が進められていた時期であった。

前年、教育改革の一環として新制大学が発足すると、学内に新しい時代にあった親しみやすい校歌をつくろうという気運が学生の間に高まった。その要望に応えたのは、昼夜学生自治会で、二万円の懸賞金をつけて学生から校歌を募った。その後、大学も新校歌作成の活動を認めて年末に本学教員を委員とする校歌審査委員会が発足したという。この委員会は五〇年一月に約百点の応募作の審査にあたったが、当選作なしという結果に終わったため、六月二十四日締め切りであらためて作品を募った。

この二度目の募集でも満足な結果が得られず、その間経済学部長の要職にあった青木得三が校歌案を作成して審査委員の大場俊助に添削を依頼するということもあったが、七月に至って辰野隆・吹田順助両審査委員の推薦により作詞をドイツ・ロマン派の詩人ホフマンの研究で有名であった独文学者の石川道雄山梨大学独文科教授に、また作曲をベルリン高等音楽院で学び山田耕筰などに師事した坂本良隆国立音楽学校教授に依頼することとなった。だが、当時学内には部外者である石川が作詞することを良しとしない向きもあったようで、石川とは別に大場自らが校歌案をつくるといった事態も起きていた。

現校歌作詞者石川道雄と中央大学校歌案

現校歌の歌詞は、結局のところ当初の学生から校歌案を募るという企画から離れて、主に石川がつくった最初の校歌案をもとに大場が新たに歌詞を作成し、石川がまた大場の校歌案を参考としながらわずか一ヵ月余りでつくるという経緯をたどったのである。その歌詞には、たとえば石川案にはなかった「白門」というフレーズが大場案には見られ、それが石川によって活かされているところもある。また、大場は作詞にあたって国内外のいかなる法律よりも人道の真理が優先し「人道の原理こそ時代を導く炬火（たいまつ）だ」ということを校歌案に書き記していた。

校歌案の作成に際して石川にどのような想いがあったのか詳しいことはわからないが、斎藤一幸の「校歌〝草のみどり〟に想う」（『草のみどり』二六号、八九年）によれば、石川は山梨大学で外国には厖大なキャンパスを有する大学が多く、その情景を交えながら大学生のあり方、ドイツ文学のこと、ドイツ民謡のこと、ホフマンの作品のことなどを語っていたという。

敗戦から五年経った八月十五日、未だ復興の途次にあって、都心の手狭な駿河台キャンパスで披露された現校歌には、大場の人道主義への想いを踏まえながら、石川によってあるべき大学キャンパスの理想像が盛り込まれたと見ることができるかもしれない。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。